

## 記紀神話を讀みなおす (2)

— (I) 創世神話をめぐって (承前)

### 大内建彦

#### 3 「高天原」「天之御中主」「独神・隱身」

— そのイデオロギー装置

前節まで、記の冒頭部分に高度に達成されている、記に固有のイデオロギッシュな側面がかなりクリアーに浮き彫りされえたとと思う。それを可能にしているキー・ワードこそが「高天原」であり「天之御中主」であった。

さて、ここではこの「天之御中主」を含む「別天神五柱」以下の冒頭七神にことさらに付された「独神・隱身」なる注記に注目し、この補捉の意図するところを跡づけておきたい。この注記は「高天原」と「天之御中主」の宣揚に相呼応する性格をもちいわば、この宣揚というアドバルーンをあげたことに付随する応急措置とみることができる。そして「高天原」「天之御中主」「独神・隱身」というこの三つのキー・ワードに内通するイデオロギーこそは、後続のアマテラスの誕生

とその統治領域の詔命の条、さらにはその先、天孫降臨の場にまで先おくり式にうけつがれ、そこに至って真に体系的集約的に受けとめられ、そのイデオロギー的機能を十全に發揮し完遂するというように展開する。ここにおいて結果的に、アマテラスと「高天原」との先験的な結びつきが明示化される。アマテラスはこの聖域に君臨し、このアマテラスを皇祖に頂く皇孫が「葦原中国」に降臨することをもって天下の王権が確定するのだと説きかける。ここに、皇祖アマテラスは王権の起源としての位置を占め、その血を継受する皇孫とその王統に、天下に唯一絶対の神聖王たることの普遍性を証しだてる特権的地位をわがものとする。そうした絶対的優位性や正統性を担保する高度に政治的理念的な意味あいを内包する神格あるいは神話的祭式的世界こそが、アマテラスであり「高天原」なのである。

こうした地平からさかのぼっていえば、このアマテラスの占拠する聖域たる「高天原」は、その論理的帰結を証しだるために神話の冒

頭にたちかえり、まず遡行的に囲い込まれた天上の聖なる「場」<sup>トギス</sup>なのである。そして、真の主宰者たるアマテラスが誕生するまでのさしあたり、その「場」の仮の主宰者としてアメノミナカヌシが振りあてられていることが明瞭に追認できる。逆に翻っていえば、そうしたイメージを神話内装置として巧妙に潜ませることによって、一大ページメントとしての「天孫降臨」神話は、その体系神話内での中心的なシークエンスをより有効的に演出しおおせたのだとわいていい。そしてこの論理を現実にはスライドさせて普遍化することで、この皇祖アマテラスの司令を体現する皇孫としての王こそが、現世の「天皇」として統治の永続性をわがものとしうるのだと宣言する。

このように、このアマテラスの神話上の論理を現実の王権と結びつけ、それを敷延しようとするのが「聖書」<sup>バイブル</sup>としての記神話の狙いなのであり同時に、祭祀対象としてのこのアマテラスが伊勢に常住するのだと説くことで、毎年くりかえされる国家祭祀の位置づけの根拠ともしているのである。これが記神話を貫く中核としての思想であり、新しい机上の着想に基づくイデオロギー的達成であったと解してよい。これほどに記ではアマテラスと「高天原」との結びつきの一体性は自明であり、このアマテラスをことさら特権化することにその特長があるが、紀の本文ではその司令役をタカミムスヒに充てることに象徴されるように、記のような観念や様相は全く認められず、記紀間で王権の正統性を説く論理そのものに明確なちがいが認められる。

さて、いささか先取りの早急に結論づけた記のイデオロギッシュ

な側面を更に、文脈に即しつつより詳しく検討してみよう。上でも触れたようにこの記の注記については、それがアシカビヒコヂ、アメノトコタチおよび「神世七代」冒頭二神にもまたがって付されていることから、次節の「神世七代」を考察するところで、別の視座をも考慮に入れて改めて触れることになる。従ってここでは、いわゆる造化三神とこの注記との関係にことを絞って考察しておきたい。

上述のように、この「独神・隠身」なる表記は紀の異伝には一切みえていない。紀本文には「乾道独化・純男」とあって一部、記の「独神」的性格にも重なるらしい側面も見せるが、「隠身」にかぎっては他には見えず、記に全く特異な観念であることがわかる。このことはとりもなおさず、この記事が、記体系神話編成時のより後次的な添加でしかありえず、このアメノミナカヌシ、タカミムスヒ、カミムスヒ至高神三神に付された注記ともども、これらの神々登場の話自体を紀本文が採らないことも含めて、記にすぐれて特殊な問題であることが容易に知れる。ところで、上で後続のアマテラス神話と関連づけて記のイデオロギッシュな性格について言及したが、それでも述べたように記がアマテラスを司令神とするのに対して、紀ではそれをタカミムスヒとしており、神話構造の根幹に双方大きく異なる点を見せている。記のこの「独神・隠身」注記は、そうした記神話双方の論理上の差異をその冒頭において先取的に示す象徴的あらわれと見ることができ。記にとつて、タカミムスヒのことさらな活動や活躍はむしろ、アマテラスの至高像をそぐものとして不要なものでさえあるにちがいない。

ない。すなわち、記が「高天原」世界を何にも先がけて設定し、その主宰神に「天之御中主」を充て且つ、この神を神統譜の劈頭に誘導した上で、それにつづくタカミムスヒを含めて、これらの神々の上になわぎ「独神・隱身」なることわり書きをさしはさんだのは、本命としてのアマテラスの到来をこの先に期してのことである。

すなわち「葦原中国」が天孫の降臨にふさわしいイメージを備ええた既に、本命としての司令神アマテラスは莊嚴に皇孫に降臨を詔命する。記においてはそうした神話プランが先行する。従って、「隱身」とされるのは、アメノミナカヌシもタカミムスヒもともにそうした、アマテラスの至高像に対する僭越をあらかじめ封ぜられた当座の仮の至高神しかありえぬことのマニフェストであつて、それが記のきわめて深遠周到な配慮に基づく思想的産果であることはいうまでもない。従って、これらの神々による伝承や、こうした注記が本来の神話に固有の本質的なものでないことは改めてことわるまでもない。

なお、司令神の違いに鋭くあらわれる記紀の思想的差異については、先々の天孫降臨神話の条などであらためて後述することになろう。

さて、この「造化三神」については、松村武雄が穩当かつ明快に區別して説くように、アメノミナカヌシは世界創成のプロセスに参画させるために新しく想定された神であり、つづくムスヒ二神はよく知られた既存の神格であるが、この二神は創世にかかわる有力神としてここに誘導されて登場しているものであることはまちがいない<sup>1)</sup>。ところで、「独神・隱身」なる注記はアメノミナカヌシ以下、対偶神直前の

トヨクモノまでの七神に付されているが、このうち後々様々に活動するムスヒ二神を除いて他は、神話上一切の活動歴を有さない。とすれば、この注記が、対偶神とは明瞭に一線を引くためのものであり且つ、とりわけ至高神三神の活動如何に対して付されたものであることが明瞭になる。

そう考えてよければ、「隱身」なる注記が「高天原」世界にどの神にも先がけて出現したこの有力三神トリオのあらわれかた及び、それから三神の以後の活動歴をそれとなく限定し規定する性格をもつものであることにまず留意してかかりたい。となればそれは、上で述べた神話の論理における記紀の差異、つまりアメノミナカヌシを至高神として立ちあげるか立ちあげないか、タカミムスヒを司令神的性格をもつ神格として扱うのか扱わないのかという、二書間の神話観想上の根本的相違の問題としてここに現象する。

さて、「独神」とは雌雄を超えた「単独神」であり「超越神」であることの表意であろうし、「隱身」は「顕身」に対してビジュアルな身体的存在であることの一種の否定であろう。とすれば、記が、この有力三神が「高天原」にまず登場したことをことさらに言挙げしておきながら、これら三神に「独神・隱身」なるネガ表記をあえて付していることの真意は何か？これら高天原パンテオンを形成する至高神トリオにそれにふさわしい姿形を与えるどころか、むしろ、その像の具現化を故意に消去しようとまでしている意図とは何なのか？こう問い詰めることで、それはきわめて見通し易い道理としてみえてこよう。

このトリオをまず高天原世界に立ち上げ、記体系神話の冒頭にもち込んで位置づけたのは、彼らに超越的な司令神役をひとまず演じさせ、天と地、「高天原」と「葦原中国」という天上界の優位と地上の従的地位を担保しつつ、二層構造の神話体系にまずタガをはめようとしたこと、すなわち、アメノミナカヌシ、タカミムスヒ以降の高天原世界にアマテラスの到来を期待し、そして地上としての葦原中国にはその血をひく聖なる権力者の招致にふさわしい神話世界を具備させるべくお膳立てすること、より具体的にいえば、高天原の神話世界に従属する大国主神話をさしはさみ、その根源神に三神トリオのうちのカミムスヒを配したらしいこと、そしてこうしたことを含めてこの至高神トリオに付した注記は、いわば当面の存在やその権力行使が過度に実体化し顕在化するようなことのないように、それを抑制し回避するための装置であり手続きであること、そうした事情が容易に透視しうると思う。

あえてアメノミナカヌシをたてて差異化を演出した記の意図は、「高天原」は本源的にアマテラスが占拠すべき聖なる「場」であり、彼女がより本来的と思しき司令神タカミムスヒの地位を襲ってそれを正當に凌駕するためには、「虚仮」の中心的所在神アメノミナカヌシをあえて架上し、その「場」をアマテラスのために塞ぎとり、至高的地位を予め確保するためだったという点につきている。それが記の語りの論理であり、そのための叙述様式であったのだ。すなわち「隠」は「カゲ」でも「裏」でもなく、単に「見せ消ち」的に新しく考え出

された記一流の一種の神学としてあるのだ。

このことを金井清一の言によってより平たくいえば、「すべては天照大神を頂点とする神々の世界の確立のために、七柱の神々は身を隠したもう必要があったのであり、「これら七神は、後続して生じたイザナキイザナミ神及びその生成過程として二神の内性に収斂されるウヒヂニ・スヒヂニ以下の八神と共に、天照大神の出現のための基盤の設営を果たす神々でありつつ（神世七代の意義づけについては、私見とは異なる。なお後述）、「天照大神以前に出現した天照大神以上と解されない神々を、天照大神のまします世界から消去しておかねばならぬ」という要請にもとづいて、「神々みずから『身を隠したまふ』』という処置を記自らが意図して書き添えたのだ、ということになる。

さて、記の神話の冒頭部に巧妙に埋め込まれている思想的装置とも呼ぶべきものは、今述べてきたように、「高天原」「造化三神」「独神・隠身」という表現の連鎖に通底するものの中に見出せるものであって、その点については、上で解析した諸点にほばつきていと思われる。

ところで、次節では、これ以降の最大の問題点、根づよい伝承形式にねぎすらしい「神世七代」の内実とその意味するところについて分析を試みてみよう。

## 4 「神世七代」の系譜とその神話

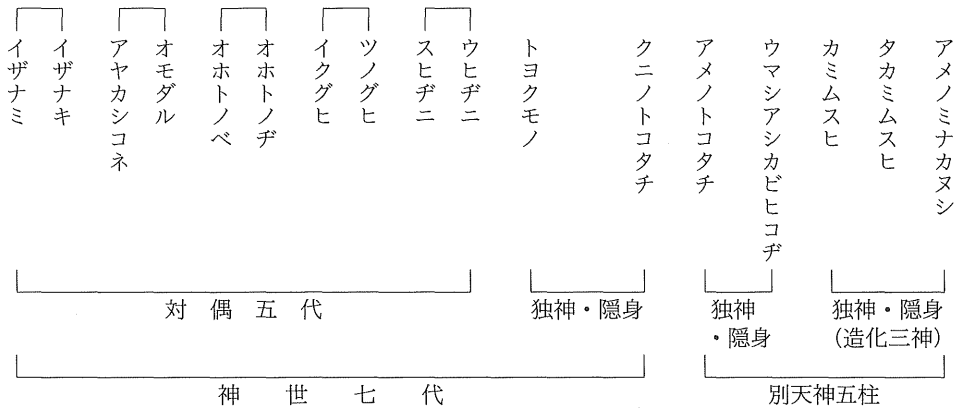
さて、記に特殊ないわゆる「造化三神」の冒頭への配置の理由をめぐって、そこに意図的に仕込まれたイデオロギー上の諸問題の解明に、いささか手まどったが、神話分析の対象を先へと進めよう。まず、記紀とも冒頭から出現する神々をそれぞれ順をおって対比的に表示すれば次の如くである(次頁)。さらに、双方の神統譜を比較対照して、それぞれの神名の出入りをもとに、より蓋然性の高い想定可能な復元系譜をも追加して掲出しておこう。こうして記紀の神統譜を対比的に表示してみると、記の特異な突出ぶりがあらためて可視化できるであろう。

さて、復元的系譜をもとに、記紀にほぼ共通の七代系譜の検討に入るに先だつて、記にのみ特殊な「別天神五柱」内の末尾に括り上げられているアシカビヒコヂ、アメノトコタチ二神に認められる作爲的性格について一言略述しておこう。「別天神五柱」なるグループピングのうち、とりわけ「造化三神」にこめられた極端に意図的なイデオロギー的性格については上に詳述した。記はこの「造化三神」に上の二神を加えて、重ねて「五」神としてグループピングしているわけだが、この二神がある種数合わせを目的に組み込まれたに相違ない性格を明白に示していよう。すなわちアシカビヒコヂは紀の本文をはじめその他の複数の異伝も示唆するように、本来「クニノトコタチ」の出現を比

喩する一種の類推アナロジーに基づく象徴物あるいは、その出現を促す一種の具体的な「物実」的なものにすぎぬのであって、紀の多くの異伝が正當に扱うように、独立した一神として数えないのが本来のありかたであつたろう。記紀の地の文の叙述そのものが如実に示すように、具体的な象徴物としてのアシカビの発生が即大地の生成なのだとするのがより本源的なものだと考えてよい。アシカビを擬神化して一神に数えるのは後次の解釈によることはほぼ明らかであろう。そしてこのアシカビを媒介に次に派生する「アメノトコタチ」は「別天神」グループにふさわしく統一して組み込むべく「クニノトコタチ」と対比的に「アメノ」を冠称し、振り分け上げたものにすぎない。「アメノトコタチ」は「クニノトコタチ」をモデルとし、ただ単に数あわせのために造型された神であることは明白である。ここでは「アメノ」「クニノ」という本来美称的並称的なものが「天」の特権性を説くための一種の区分け装置として機能させられている点を確認できればよい。要は、「アシカビ」なるものがあくまでも、「トコタチ」に先立つ媒体、媒介物であることそして、そのイメージが明白に指示するように、植物の萌芽とそれが「クニ」の「トコ」に深く根ざすとする、あくまでも地上的大地的なるものの表象であることを銘記しておきたい。本来「天」的イメージを具現するものではないことはいうまでもないであろう。こうした基本的事項の了解を前提すれば、記紀の「神世七代」の神統譜のより原型としてのありようは、地上イメージに立脚したクニノトコタチ以下イザナキ・イザナミ対偶神までを指すものと

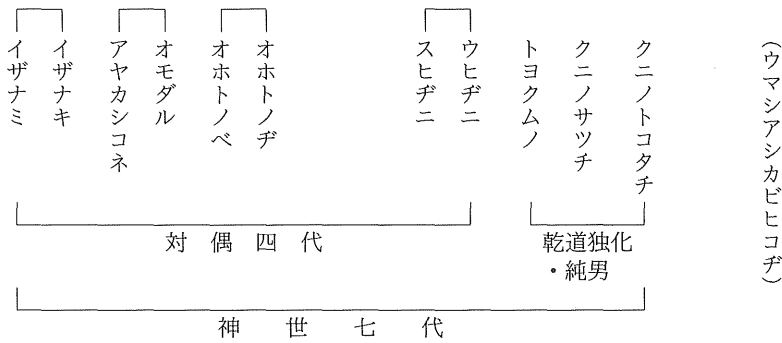
記

(高天原)



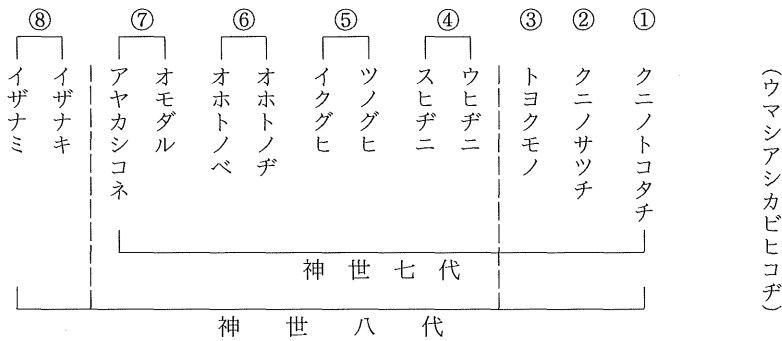
紀本文

(天地之中)



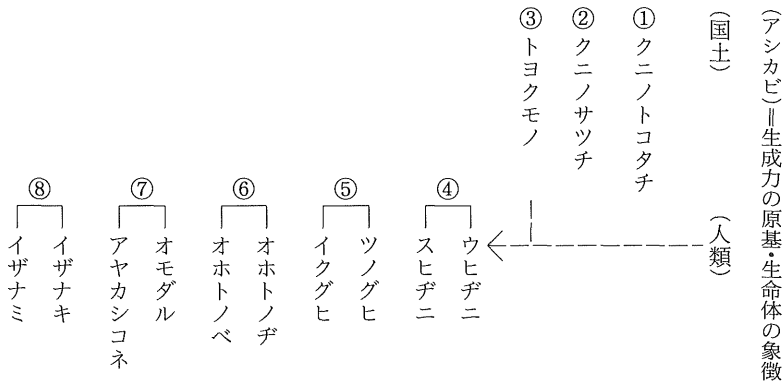
復元型 (I)

(天下)



復元型 (II)

(天下)



考えていいことが確認できよう。

さてこのアシカビ以下、おおむね神名を羅列するという形をとつてすすめられるこの部分は、R・B・ディクソンのいういわゆる「系譜進化型」の創世神話に属するものと広く支持されており、今日ではほぼ定説化しているといつていい。この神話類型は本来、宇宙のはじまりや世界の起りを説き、その創世の進化の諸段階を素朴ながら様々な神々の出現に仮託して物語る形式のものをいう。記紀のこの系譜部分はそうした世界の順次的な進化形成をもくろむ観念が明瞭であるときながら、いざその内実を具体的に辿るとなると諸説紛々、その混乱ぶりはいかにもはなはだしいといった有様だ。従つてこの部分を考察の俎上にのせるにあつて、まず何が問題か、何が解明されるべきことが明確に整理してかかる必要がある。

このアシカビ以下七代系譜に関しては、諸注釈および諸論考とも一系のものとして扱う点において共通している。すなわち、単独神二〜三代プラス対偶神四〜五代からなるこの七代系譜を既定の枠とみ且つ、その内実も一系の一連の観想に基づくものとア・プリオリに見なされている節がある。しかし進化的論理によるらしいとはいへ、単独神と対偶神という形態上の明確な違いがあり且つ、記が「独神・隱身」とし、紀が「乾道独化・純男」と注記して、これら単独神と以下の対偶神とに一線を画しているらしいことを考えあわせると、この一連の単独神と対偶神との結びつきを本来的なものとして無批判にきめてかかることはできない。案外、後次的な接合による所産であつた可能性

もある。こうした基本的な疑点を不問に付したまま、これらの神々の上にそれぞれ恣意的な解釈が与えられ、その連鎖の上に様々な神話的イメージが描き出されてきた。従つて単純に一連のものと見うるのだろうか、疑問をさしはさむ余地はあろう。

さらに、これらのイメージのたち上げに参与する個々の神名自体、今日ではすでに名義未詳や不詳のものがほとんどで、様々に語釈が試みられても、それ自体に十分な確証を与えることさえほぼ不可能だという難問もある。西宮一民の「文脈そのまま」と「文脈離れ」の二分法論に倣つていえば、文脈密着型の語釈解釈から、文脈離れのはなはだしいそれまで、あるいは国語学的言語学的根拠に乏しい場あたりの思いつきのそれに至るまで、その試解の例示には枚挙にいとまがない。この個々の恣意的な解釈の上に更に、壮大な宇宙論的イメージから人祖的なそれまで、様々な神話的イメージが組みたてられてもいるわけだが、目下、こうしたあまたの仮説が雑居状態のままというのが現状である。そして、その整理さえ手つかずのまま、該神話全体のもつ一つの方向性や統一的イメージさえも見出しえないまま放置されている。数少ない異伝、乏しい伝承、国語学的見地からみた語釈の限界など、様々な悪事情も手伝つて、確度の高い説得力に富む生産的な語釈や全体像を生み出しえざにしているのが現状である。

更にこうした困難に輪をかけて、この神話部分が、後続のより新しいキ・ミ二神による島生みという優勢な神話にとって代わられ、神話の語りのウェイトが大きくそちらにシフト・チェンジしているという

文脈上の事情もある。キ・ミを導きそこにいたるまでの神々の神話は、キ・ミ二神によるスケールの大きな別の胎生型の国生み神話にその座を譲り、その結果、創世神話としての本来的イメージや本旨を大いに稀薄化し、いわば局所的な傍系神話としての位置に押しやられている感さえある。この七代系譜は、いいかえれば、キ・ミ二神の出現をお膳立てし、そこに至るまでの時間のゆるやかな展開とその場の形成をも語る神話的序奏としてあるいは、キ・ミ二神の出現をきわだたせるその背景をなしつつ、神話的時空間をそれとなく演出する一種、舞台装置の役目を荷ってここに再構成されているとみることが出来る。

こうした重層するアポリアの複合的性格が、この部分の本態を遡行的に究明することを大きく阻んでいるといっている。従って、問題の所在を明確化し、そこに潜む史的階層にも十分注意を払いつつ、慎重かつ果敢により確度の高い仮説を求める試みが挑まれてしかるべきである。こうした認識にたつて、最近の成果をもとり込みつつ、ここに新たな一つの見解を提示してみよう。

ところで、これはもう広く既知に属することだが、記紀ともにその初源の神々を「神世七代」として一括しているが、これが中国伝来の聖数観に基づくグループピング法であることは、多くの諸家の指摘があるごとく、あらためて述べたてるまでもないことであろう。その徴証は記においてさらに著しく、三、五、七なる陽数としての奇数によって整序されている跡がきわめて顕著である。記紀編纂当時この統括法が新たに導入されつつも、「大八島国」「八俣大蛇」にみられるように、

より古層の「八」なる聖数観も共存しており、「神世八代」が「神世七代」によって駆逐された可能性もないとはいえない。

さて、蓋然性の高い復元系譜(Ⅰ)を媒介させて記紀双方の系譜の相違点を比較してみると、発生あるいは生命母体としてのアシカビを一神扱いとすることはとりあえずこの際ありえぬこととみて除外すると、双方のクニノトコタチ以下七代系譜の出入りが、単独神クニノサツチ一代を削るか、対偶神一代のどれかを削るか、そのどちらか一代を削除するという事情に起因するものであることが容易に認めしうる。そこで、松岡静雄は当時、相当ポピュラーであったらしいこの七代グループピングを一つの数的祖型と考えて、この七代系譜の末尾のイザナキ・イザナミ対偶一代を後次的に加えたがためにその前のどれか一代を任意に削除せざるをえなかったものと解し、右の復元形(Ⅰ)のクニノトコタチからオモダル・アヤカシコネに至るまでの七代をこの神統譜の原型とみなした。以後、倉野憲司、大林太良をはじめ、その仮説に追従する学者も数多い。<sup>3)</sup>

その一方で、復元型(Ⅰ)のキ・ミ一代を加えた型にみられるように、この「神代七代」は単独神三代プラス対偶神五代の八代を原型とするもので、それが新しい中国式の三、五、七グループピング法に倣って一代が削除されたことによつて「神世七代」となったとみる松村武雄の仮説もある。<sup>4)</sup> 松村はより古層の「神世八代」なるものの存在を積極的かつ具体的に想定しているわけではないが、上でもふれたように、「神世七代」にとつて代わられた「神世八代」なる系譜が本来ありえ



たこともその可能性として浮上してこよう。この二大仮説の問題は、この系譜の最後尾キ・ミ二神がより初源的な系譜のうちに定着していたか否か、すなわち本来的に對偶神五代の最後に位置するペー神として当初から組み込まれた存在であったかどうかという問題に帰着する。これがまず問題点の第一である。そしてこの点に付随して、キ・ミ二神の前後に相渉つて矛盾のないイメージの二重性も大きく問題となろう(なお後述)。

ところで、この二つの代表的な仮説は、「神世」が本来七代であったか八代であったかはさておき、その内実が一連一系のものであったとする点で共通する。つまり、双方ともア・プリアリにその内実が一貫するイメージによるものと見なし、そこにある種断絶を認めない所説である。そこで、問題点として浮上してくるのは、上でも示唆しておいたように、この「七」あるいは「八」代を構成する単独神と對偶神との合体した神話が、双方論理の内通する本源的且つ本質的な神話であったかどうかという点である。もつと簡略化していい切つてしまえば、前者と後者とが切り離し可能かどうか、すなわち単独神三代の神話と對偶神五代の神話とはそれぞれ本来別種の神話であったものが、ある神話的観想の下に結合されたものと認定しうるかどうか、という問題である。

まず前者の第一の問題点から。すでに上の、松岡静雄の所説で紹介したように、彼は「神世七代」を根づよき祖型とみて、この系譜にキ・ミ二神を後接したために、それに先立つどれか一代が玉突き式に

はじき出され、その結果が現行の七代系譜であると考えた。それに対して、松村武雄はこの「神世七代」の後半の對偶神の初源形式はキ・ミ二神を含めて五代十神であったと考え、本来の八代型式が一代切りつめられて現行の七代となったと見なした。

さて、どちらの仮説に利があるか。一連の對偶する神名のあり方と、その五代のむしろ自然な神名の流れからいって、松村説のいうように、對偶神五代がより初源的な型式で、それらを含む八代を七代に切りかえてグループピングしようとしたために、一代の出入りが生じたとする見方が、目下のところ積極的な理由は見出しえないものの、より理にかなっているように思える。現行の七代系譜の神名のあり方からみて、松岡説のいうごとく、對偶神四代に後から別系のキ・ミ一代を組み込んだことによる結果とも、にわかに判断しがたいからである。とすれば、以下で論ずべき問題は、より初源的グループピングとしての「八代」は三プラス五として、つまり単独神三代の神話と對偶神五代の合成神話として、別種のイメージを内蔵する神話の複合型として選元的に考えることが可能かどうか、そして、そこから逆に翻つて、それら二種の神話を包摂し、神世七代として括り直した時、そこに新たに見出され、意味づけ直された観想なりイメージなりはいかなるものであったのか、この大きな二つの疑点に集約できると考えられる。

まずそこで、先の復元型(Ⅱ)で示したように、いささか恣意的ではあるが、三代系譜と五代系譜を切り離して表示してみよう。

(アシカビヒコヂ)

(アシカビヒコヂ)

クニノトコタチ  
クニノサツチ  
トヨクモノ

ウヒヂニースヒヂニ  
ツノグヒークグヒ  
オホトノヂーオホトノベ  
オモダルーアヤカシコネ  
イザナキーイザナミ

(人体の生成)

こう切り離して見る時、いちいちの神名そのものの吟味はさておき、前半の単独神三代の神々の順次の登場が同時に、国土の進化的生成をダブらせた神話的語りとなっていることは見やすい道理であろう。そして後半の対偶神五代、すなわちペーア神の次々の登場が、これまた同時に、人体の姿形と叡知を完形に至らしめる進化的生成の諸段階を重ねて、それをなぞるように叙述されていることも疑いえないであろう。とすれば、この二つの系譜の本来のありかたからいえば、一方は国土レベルの態様にあり、一方は人体レベルの態様にあつて、それぞれ双方に孕まれる神話的世界観には位相上、根本的な差隔があつたものと認められる。にもかかわらず、その二つが前後に布置し一系的に整序されて一見矛盾がないのは、双方がともに進化的な展開相に立脚する点において共通し、そしてその進化的なものいわば初発の核として、アシカビ的な「生命体」「生成力」がその根源的象徴的なイメージとして共に含意されていたからではなかつたか。根を張る植物が大地をより堅く築き固めるように、人間を植物になぞらえて青人

草というように。

少しく神名に即していえば、前に位置する単独三神は、クニノトコタチ(土台としての土地の出現) ↓クニノサツチ(聖なる大地、聖なる農土の生成) ↓トヨクモノ(肥沃な野の拡大) といった、大地生成の段階的なイメージ連鎖を述べたものであらうと思える。後の対偶神五代は、ウヒヂニ・スヒヂニ(砂と泥土の出現) ↓ツノグヒ・イクグヒ(葦芽や杣のごとき男女の生命体の成育) ↓オホトノヂーオホトノベ(男女性器の具備) ↓オモダル・アヤカシコネ(人間的形態の完備) といった、植物生育のアナロジをかりて、それを当初より男女区別のある人間生成の段階的イメージに重ねあわせて述べようとしたものと解しうると思える。

このように、本来二つに分離しうることの双方の神話とともに、その根源的発生源のイメージとして植物的生命体を共有する点において相重なり、それを核に同時並行的に異なる時間相の中でそれぞれ別々に、世界の起源と人類の起源を基礎づけるものとしてあつた。一方は国土生成の神話を語り、もう一方は人類の祖先の神話を語るというように。世界観やシンボリズムを根本的に異にするこの二つの神話が普遍的な時間軸の下に、進化的歴史観にもとづいて前後に配され、リアルな時間の中にも整序された。大地の生成を先に、男女人類の出現を後に、近代的な時間観念にもとづいて別々の二つの系譜をリンクさせた、これが現行「神世七代」系譜形成のプロセスではなかつたか。一つの仮説の提示にとどめて、後考を俟ちたいと思う。ただここで、

少々留保しておきたいことは、稿者はこの七代系譜を、積極的に切断の契を入れうるものあるいは入れるべきものと必ずしも考えているわけではないということである。いささか消極的な推察に終始している所以であるが、かといってそれが初源から一系的なものであったと積極的に主張しうる論拠も目下見出しうるようにも思えない。

ところで、上でも注意を促しておいたように、ここでもう一点きちんとおさえておかなければならないと思えることは、イザナキ・イザナミ対偶一代の孕みもつその像の二重性についてである。すなわち、このキ・ミ男女神一代は体系神話上、一つの大きな結節点、あるいは蝶番としての位置を占め、前後双方に相かかわる二様の役割を演じているという点を看過すべきでないと思われることである。つまり、キ・ミ二神は、先だつ系譜に対してはそれらの発展的段階的な進化相の叙述を受けとめて、いわばその完成態としての一種人祖的な様態とその性格を示すと同時に、後続の神話群に対してはペアーによる一大主人公として、時には陰陽二大巨人神として、諸々の神話を始動させる自律的な主体としての機能をも示威しているという点である。それは簡単にいつてしまえば、本来全く異なる複数の固有の神話がストーリーの展開上、一応矛盾のないように式になぎ合わされる際、それを一貫して包摂する主人公として偶々キ・ミ二神がふりあてられたという問題である。その場合、キ・ミ二神は本来どの神話に固有の主人公であったのかあるいは、それらを統合する上で新しく案出された主人公であったのか、そうだとすれば、いかなる意味合いや構成上

の論点から抽出発案された神名であったのか。いく通りもの可能性の考えられるこの難問に正面から挑み、一つの答えを見出しそれを特定しようとなれば、記紀神話前半全体を根本的に読みとき解析する上で、きわめてラディカルな決定的視座を提供してくれるであろう。

たとえば、前後の文脈に即して考えれば、イザナキ・イザナミなるペアーの神名自体が前者に属することによって命名されたものであるか、あるいは後者の創造的神話の主人公にふさわしい神々としてこちらに固有に称名されたものであるか、少くとも二様の解釈の可能性があるのだが、稿者は目下どちらとも断じかねているというのが正直なところである。具体的にいえば現行のほとんどの注釈書が説くように「誘い合う男と女」というような意味合いを有するとなれば、後続の神話中から導き出された比較的新しい称名ということになる<sup>5)</sup>し、村山七郎のいうように南島起源の古層に属する「最初の男と女」というような意味合いをもつとすれば、前後の神名フローからみて前者の先だつ系譜につらなる名称だということになる<sup>6)</sup>。加えて、この前後の神話構成の文脈から離れて、全く別の第三の神話に基づく称名であったか、あるいは又、全くのフィクションとして造型されたか、そうした可能性もないとはいえない。ともあれ、キ・ミ二神の神名の解説は、この称名に固有の神話がいかなるものであったかを含めて、このあたりの神話の複合性重層性といった記紀神話の構造的な性格を解析する上で、一つの大きな鍵を握っているといつていい。今後さらさら複眼的視座の下に、その究明はより深く広く追求されてしかるべきであろう。

さて、ここで翻って全く逆に、この現行の七代系譜を矛盾を蔵しない本来一連の系のものとして積極的に認めてかかる立場に立てば、新たにどんなことが見えてくるであろうか。この七代系譜の上に見出されている観想とは一体いかなるものであったのか。いいかえれば、連続する七代系譜に込められた、トータルで自己完結的な神話上の論理なり観想なりは一体何だったのか、その点について少々言及しておきたい。

かつて稿者は、最後のキ・ミ二神は後次的な組み込みによるものとみなし、単独神三代プラス対偶神四代つごう七代をより初源的な形態であったと指定し、前半は国土の生成を、後半の対偶神四代は人祖の起源を説くより古層の神話とみて、七代系譜の内実の考察を試みたことがある。とりわけ四代の対偶神が指示するのは、土中からの植物発生をアナロジーとする啓発進化型の人祖すなわち、海辺に生育する葦の旺盛な生命力成長力のイメージを媒介に、アシカビが泥中から角ぐむように、土中から人類の祖先が出現したのだと語る神話であったと考<sup>(7)</sup>えた。

そして、さらに先を見越していえば、この七代の神話は、つづくキ・ミ二神によるオノゴロ島の生成とその島への(天降り)、そして結婚、国生み、神生みという一連の神話ストーリーによって反復され語り直されてゆくのである。すなわち、この新しい別様式の神話の方向へとその力点がスライドされ、その地平から改めて七代系譜が位置づけ直され、読みかえられた結果、上でも述べたように、この七代の神

話は後景へと退き、それはキ・ミ二神を合理的に導き出すための一種の装置へと変貌する。つまりキ・ミ二神の出現がいわば、無時間の唐突なそれではなくゆるやかな史的時間の経過を辿り且つ、彼らが単に無機的な抽象的な神ではなくフィジカルでビジュアルな存在であることを印象づけるものへと機能変化していると思われることができる。

すでにくり返し述べてきたように、キ・ミ二神一代をどの神話に固有の神として位置づけるべきか、このやっかいな問題は今はつみ残さざるをえないにしても、この神世七代の語りが最終的に上述のような人祖起源を説くものとして理解され、キ・ミ二神を自然に導き出す一種の仕掛けとしてここに配備されたものと理解していいように思われる。

稿者のこの見解に近いものとして近年の金井清一の所説がある。この仮説は、西宮のいう(文脈そのまま)の読みの代表格として評価され、しばしば引用される所説の一つであるが、この七代系譜を一連のものともみなしうるとする立場にたてば、その意義づけには一応の妥当性が認められるものとい<sup>(8)</sup>ってよい。

金井はこの七代系譜はしばしば説かれるような国土(大地)の形成や生成を含蓄するものではなく、キ・ミ二神を最終的完全体とする神の出現の次第を、その身体的現出の進化的具体的諸相を通して指示しようとしたものと解した。すなわちこの七代の推移は、神々の生成の場の設定↓神の原質(泥)↓神の最初の形姿(杙)↓神の性的部位具有(性器)↓神の形態容姿完成(面足・畏)↓神の行動開始(誘)と

いう神々の発生出現と、雌雄の区別の上にたつ諸々の行動の開始を含蓄するものとする解釈である。上述のように、この七代系譜を一系的なもの、漸進的段階的諸相を示すものとみなせば、その限りで、妥当性の高い解釈として首肯しうる側面を有している。要は、人祖的なイザナキ・イザナミ一代を以下の神話の展開にむけて立ちあげることが、この七代系譜もち込みの究極の目的であったことは自明であつて、つまり現行テキストの系譜は表層的に、そう解しうるように再構成されていると思うからである。

ところで、この金井説にかぎらず、この七代系譜を所与のものとして、表層的に且つ文脈上つじつま合わせ的に読みといてしまうことの難点について一言しておきたい。上でも引用したごとく、西宮がいみじくも「文脈そのまま」と分類するように、これらの所説はこの系譜の原態に対する配慮がなされておらず、いわばそれを伝承性をもつ既存のものとして、ア・プリオリに分析対象としているところにそもそも問題がある。いわば金井説は編成上あるいは再構成レヴェルの意図的な意味合いの解析を試みようとする所説であつて、その限りで一定の意義は認められるが、すべてがそのレヴェルでのみ固定的に考えられるとなると、神名の原義なり本来の神話の世界観なり、あるいはそれら拉し来られた神話の本来の論理なり構想なりが、当然のことながら見失なわれてしまうという危険性を孕む。

ところで、上で復元系譜を提示しておいたように、この七代系譜は本来八代のそれであつたと考えられ、その先頭部の単独神は三代で、

それらはアシカビを媒介にクニノトコタチ↓クニノサツチ↓トヨクモノと系譜づけられているのがより初源的なものであつた。上で私見の一端をのべたように、この三代の系譜はアシカビという根源的な生命体をシンボルとして、その生長の姿にあやかる如くこの大地が上方へあるいは左右水平に広大化豊穰化していったと説く進化型の神話であつたと考えられる。ところで、金井は、クニノトコタチ↓トヨクモノの二神の展開の上に「神の生成の場」とそれにつづくまだ未完の「二次的な場」を認取し、更に「隠身」なる注記ともからめて「視覚的、触覚的な実体を持たない神であり、今やそこで何事かが始まろうとする気配を予告する神」と解析するのだが、この分析の前提なり、手続きなりも含めてこれでいいか。「クニノトコタチ」に先だつ「アシカビ」なるものの存在が全く無視されており、脱落している。「クニノサツチ」には触れず、しかも最終的な注記とおぼしき「隠身」を論拠に、この二神を上への引用のごとく「視覚的、触覚的な実体を持たない神」と論断している。具体的表象としての「アシカビ」は、捉えがたい抽象物としての大地を、このビジュアルな生命体を核に、豊かに万物を孕み穰らせ息づく沃野としてのイメージを秘蔵するものと見るべきではないか。そして「隠身」なる注記には、「アシカビ」を媒介に読み手の前に立ち上げられてゆく大地生成の具体的イメージをむしろ消去し縮減させるべく、案出された表記ではないのか。一見説得力をもつかにみえることさら文脈により添う読み方は、くり返しいうように、神話の本来の意味や神名の原義の解明への道を鎖すばかりか、それを

隠蔽することにつながろう。

この復元型としての八代系譜がより初源的に一連の系列的系譜であったとすれば、その単独神三代と対偶神五代との結合のあり方は、金井の説くように前者三代は後者五代の神話展開を可能にする単なる生成の場の設定として矮小化して読みとられるべきではなく、大地の生成を「アシカビ」に媒介させることで、人間という有機的な生命体自体をも育むものとして、その大地の豊饒さを前提するために前置しているのだとでも解すべきだろうと思える。あらゆるものに先だつ宇宙論的な生命の発生が比喩的であるとはいえ「アシカビ」に求められたことを契機に、単独神三代系譜と対偶神五代系譜はごく自然に結びついた。豊かに生成される有機的な生命体としての大地は、その裡に、動植物も人間もその雌雄も、それら生命の全てを宿す母体だと語ろうとするところにこの神話の源泉としての意味があると思える。そうした基本的な観想をいわば土台として、この一連の「神世七代」系譜の神話は成り立っていると考えられる。ごくごく素朴で身辺の具体物に借りた稚拙な発想であれ、簡単な進化の観念にもとづく語の羅列であれ、そこに見出されようとしている大きな神話的観念をこそ汲みとるべきではないか。そうした姿勢こそが古代神話の研究によりふさわしい開かれたアプローチとよぶるものではないであろうか。あえてそうした姿勢や視座をも顧慮し、その分析成果を留保した上で、七代系譜の現行テキスト内に占める限定された説示イメージを考察するのがテキスト批判の手順であろう。そうした複眼的視座に立ちえた時、記

紀神話に随所に仕掛けられたイデオロギー装置が自ら露わになってみえてくるのではなからうか。

ところで、周知のごとく記紀体系神話はそのはじまりにおいて、創世にかかわるあらゆる実質的なものの全てを、キ・ミ二神に仮託するというかたちで展開してゆく。七代系譜の末尾に位置するこの陰陽対偶神の登場とその活動の開始をまって、記紀双方とも本格的且つ実質的にその神話世界の幕を切っておとす。彼ら能動神の積極的な行為行動を通じて創世が語られ、凡ゆるものが創造されてゆく。そうした神話的展開とも相まって、キ・ミ二神の出現を促すこの七代系譜は、本来の宇宙創成に関わると思しき神話としての意味合いを限りなく稀薄にし、それに代って、ことさら単調なこの神々の羅列はいつしかただ単に宇宙創成にかかわる時間的推移を代弁するかに過ぎぬ性格を露にし、そうした色彩を次第につよめてゆく。その結果、この「神世七代」系譜はいわば、キ・ミ二神を自然な形で導き出させるためだけのいわば、実態の見失われたイントロダクション的性格を強く帯びるにいたる。

記紀が、この進化型の七代系譜によって、人態的な完成体としての姿形をもつ兄妹あるいは、天父地母的世界巨人、宇宙原理の二元的陰と陽、そうした複相的性格をもつキ・ミ二神の出現を具体的且つビジュアルに説示しておこうと意図していることは明らかであって、キ・ミ二神の出現以降、記紀体系神話は創世にかかわる神話的事象の一切をこのペアー神に仮託しようと目論んでいることはくり返すようにい

うまでもない。加えて、記の「造化三神」の冒頭のたちあげという事態のはざままで、この七代系譜は益々その実質や実態を稀薄なものとしてゆく。

ところでこれまで、アメノミナカヌシとアマテラスとの密接な関係についての分析を中心としてきたために、造化三神のうちのあとの二神、ムスヒ二神の神格についてはほとんどふれることがなかった。このムスヒ二神に揺曳している陰陽的性格をも含めて、これ以降このムスヒ二神がそれぞれ、高天原神話圏、あるいは出雲神話圏とも呼ぶべき神話圏を主宰するかのとき性格をも合わせもっており、記紀神話の個別的分析をおえたあとで改めて、より大きな視野の下で全体的な構想なり構造なりとも絡めて触れるべき一大問題かと思う。

さて、次節では、すぐ上でも少々触れたように、いよいよキ・ミ二神を主人公とする壮大な神話の本論に分け入り、分析を進めてゆきたい。

## 〔注〕

- (1) 松村武雄『日本神話の研究 第二巻』、培風館、一九五五年。  
 (2) 金井清一「神世七代の系譜について」『古典と現代』49号、一九八一年九月。同「身を隠したまふ神」同誌53号、一九八五年九月。

- (3) 松岡静雄『紀記論究第一巻 創世紀』、同文館、一九三一年。倉野憲司「全註釈」、西郷信綱「注釈」などもほぼ同じ。大林太良『日本神話の起源』、角川書店、一九六一年。西宮一民「古事記」〈新潮日本古典集成〉、一九七九年。最近の神野志隆光「古事記」〈NHKブックス〉、一九九五年、などもほぼ同様。

- (4) 松村前掲書。

- (5) (3) 前掲書等参照。この説がほとんどといったところ。

- (6) 村山七郎・大林太良『日本語の起源』、弘文堂、一九七三年。川本崇雄「南から来た日本語」、三省堂、一九七八年。

- (7) 拙稿「前創世神話考」『古代研究』9号(早稲田古代研究会)、一九七八年三月。

- (8) 西宮一民「日本書紀の神話」『日本神話必携』(稲岡耕二編、別冊国文学)、学燈社、一九八二年一〇月。

- (9) 金井前掲論文。